

## 故 金子武蔵顧問(前理事長) 追悼

鈴木 三郎

本協会顧問(前理事長) 金子武蔵先生は、昭和六十二年十二月三十一日、心筋梗塞のため入院先で逝去された。平素あれほど御壮健であられた先生が享年八十二歳で突如として世を去られるとは、全く思いもかけないことであり、まだまだ永きに亘って御指導を受けられると信じていた我々の悲歎は喻えようもないものであるが、茲に、協会創立(昭和26年2月)以来三十七年間に及ぶ先生の鴻恩に深い感謝の情を捧げつつ、謹んで哀悼の誠を致す次第である。

先生は昭和四年東大哲学科卒業後、実に精力的に名論文を矢継早に発表され、昭和八年筆者が同科に入学した頃には、既に新進気鋭の学者として斯界の注目を浴び、我々後輩の憧れの的であられた。先生の御関心と学殖の広さは哲学のあらゆる部門に亘り、各テーマの焦点に据えられる哲学者たちは数多の時代と国に跨がるものであった。「これらの論作は後に、戦前の論文集『形而上学への道』『実践哲学への道』中に収載されている。」先生は昭和十年より哲学科講師となられ、卒業まで僅か一ケ年ではあるが、凶らずも筆者は先生と師弟の間柄という光栄に浴することになった。それから大学院生の時期にかけて、「哲学会」の諸会合や御自宅訪問の折々に賜った先生の親愛に充ちた激励の御言葉の数々は脳裡に深く刻まれているが、その後永のお訣れするに至るまでの長年月の間の数え切れない程の想い出と共に、いずれ別の機会に語らせていただくであろう。

本協会創立の企ては、戦後ヤスパース研究が取りもつ縁で結ばれた草薙正夫・武藤光朗両教授と筆者との親交の中から生れたのであるが、理事長には著名な先生に成っていただくとういうことで、実存哲学にも御理解の深い金子先生にお願いすることになり、右に述べた先生との御縁から、筆者が先生をお訪ねして御快諾を頂戴したのである。爾来、先生の御指導の下に本協会(当時は「ヤスパース協会」)は、機関誌『実存』の発行(26年9月創刊)と、内外の哲学者・文学者を招いての講演会・座談会(時にはキルケゴール協会との共催)の開催などの活動が続けたが、次第に文化潮流や出版情勢の変化に順応し切れず、早くも衰退の兆しが見え始めた、ちょうどその頃、「実存主義協会」設立の機運(本誌第4号14頁参照)が盛り上って来たのは、本協会にとって正に幸運であったと言えよう。かねてより協会の将来を心配しておられた先生は全役員・会員を挙げて敢えて積極的にこの新協会設立に参加するよう指示され、その創立総会(32年2月)において新協会の理事長を兼任されることになったのである。そして同時に『実存』は第10号(32年9月)から『実存主義』と改題されて―講演会等の事業と共に―新協会に引継がれ、今日の「実存思想協会」への改組と共に廃刊されるまで―先生門下(東大倫論学科出身)の優秀な執筆陣の加勢もあって―市販の季刊誌として実に目覚ましい発展を遂げたのであった。

当時、ヤスパース協会の理事長以下理事全員の考えでは、新協会の設立は、ヤスパース協会の発展的解消を意味するのではなく、国内活動(諸行事の開催・機関誌による研究発表)は新協会の構成員として行いながら、対外交流面では、依然独立して存続する国際的認知団体であった。また実際その後も、ヤスパース生誕八十年祝賀

式典を始めとして各種の記念行事には、金子理事長名でのメッセージないし講演代読によるヤスパース協会の参加があり、ヤスパース逝去に際しての協会の弔電も届けられているのである。やがて先生は御老齢の故を以て、兼任されていた理事長職のうち、実存主義協会のそれを小倉志祥氏（東大倫理学科教授）に（昭和四十九年）、ヤスパース協会のそれを筆者に（昭和五十八年）それぞれ各理事会の同意の下に継承せしめられ、以後も引続き顧問として御指導をいただくことになったが、今日、両協会が隆盛に向う進展を遂げつつあるのも先生の先見と勇断の賜物にほかならない。「筆者が新理事長として、「ヤスパース生誕百年記念シンポジウム」（一九八三年）に公式招待されて出席した際の感銘に促されて、帰国後、協会活性化の企画に取りかかり、翌昭和五十九年、新組織と新機関誌『コムニカチオン』による再発足を実現した経緯については、既刊の本誌の記事通りであるが、先生はこの挙をこの上もなく御歎びになり、激賞と激励を忝くしたのであった。」

先生が生涯を貫いて最も情熱を注がれたヘーゲル研究は、『国家』『精神現象学』（上・下）等の名訳著に結実しているが、ヘーゲルの全著作との内的連関、伝記的現実の背景的対応に関する微に入り細を穿つ厩大な注解と、これを踏まえて一言一句をも忽せにせぬ彫心鏤骨の訳文は、世界レベルをも遙かに超出して永世に冠たる先生独自のものとして誰しも敬仰するところである。これ程ヘーゲルの偉大さに傾倒された先生が、戦後は――ヤスパース協会理事長になられたことが機縁となって――更にヤスパースの本格的研究に向われ、ヤスパースを目して、「哲学史上カントやヘーゲルにも比肩する偉大な哲学者」と高く評価され、その成果を優れたヤスパース解

釈の名著『実存理性の哲学』にまとめられたのである。なお、先生の倫理学体系の書『倫理学概論』の重要な領域にヤスパース哲学の影響が色濃く刻印されていることは、先生も自認されていた周知の事柄なのである。

このように、終生学究一途に哲学者としての偉大な業績を全うせられた先生が、ヤスパースに深い共感を覚えられ、さればこそわが日本ヤスパース協会と長年に亘り深い縁を結んでいただけたことは、当協会員一同の光栄であり、感激おく能わざるところである。それ故我々としては、おたよりの度毎に「協会の益々の発展を祈る」と記されてあつた亡き先生の御期待に沿うて、いかなる困難をも克服して、世界最古の伝統を誇る本協会を推進して往くことこそ、永えに我らの責務であると誓いを新たにする次第なのである。

今や超越界に浄福を得られた先生の御霊におかれましては、その功德を以てこの上共我らを援け導き賜らんことを伏してお願い申し上げます。合掌

